今日のみ言葉 289 「死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」 2019.12.10

闇の中に住む民は
大いなる光を見た。
死の地、死の陰に住む人々に、光が射してきた。（マタイ福音書4の16）
The people that lived in darkness have seen a great light;
and for those who sat in the region and shadow of death light has dawned.

私たちは、闇の内にある。それは政治の世界を日本や世界でみても、また個々の人間についてもだれでも何らかの闇が心にある。日本が自殺大国といわれるのも、その闇がその人間全体を覆ってしまったとき、死に至るゆえに、この科学技術や経済の進展した日本でも、ひとたびその内部を見るときには、深い闇が人々を包んでいるのがうかがえる。いま元気いっぱいはたらいて何の空しさも感じていない人たちも、いずれ闇ー死の中へと向っていく。すべてのものは時が経つとともに滅び闇に沈んでいく。太陽さえも究極的には消えていく。闇は宇宙に満ちている。

このように物理的にも精神的にも至るところに闇がある。

しかし、聖書は、そうした人間や宇宙に満ちている闇のただなかに、光が存在する、しかもそれは太陽や星々の光のように有限でなく、永遠の光であり、しかも人間の魂をもその内奥を照らす光であることを、最初から宣言している。

はてなき闇と空しさの満ちた世界に、神が光あれ！と言われたことによって光が生じた。（創世記1の3）

そして二千年前に地上に生まれたキリストは、その光の具体的な表れであった。

数々の電飾、LED などの発達により、物理的な光がいかにきらびやかに満ちていようとも、それらは人間の深い闇には射し込むことはない。生きることさえ絶望となっているような痛みや苦しみ、悲しみの深淵には、到底入っていくことはできない。

そこに射し込む光、その闇の心に昇ってくる光こそ、キリストだった。

キリストの光は、いかに重い罪を犯した者であっても、兄弟親族からも、さらにどんなに人々から見捨てられ、軽蔑されても、なお心から求めるだけでそこに射し込んでくる。

そしてこのことは、じっさいに体験できることであり、そうした何らかの体験を与えられた人がキリスト者となる。

求めよ、さらば与えられん というキリストの言葉の真実性がここにある。

野草と樹木たち　コバイケイソウとミヤマキンポウゲ　木曽駒ヶ岳

2019.7.26

白いすっくと立っている花は、高山の花として広く知られているコバイケイソウ（小梅蕙草）。

数年に一度たくさん咲くので、多くの花が咲いて壮観だったからと２年後も訪れたら、ほとんど咲いてなくて付近の景観そのものがまるでちがって見えたので驚いたことがあります。（福島県の吾妻山系での経験）

この花の撮影地点は、多くの人が訪れる氷河がけずった平地となっている千畳敷と言われる地域から大分登ったところの標高2800m付近で、厳しい寒さ、風雪にさらされる環境にあり、そこでもこのように大きく育ち、力強い驚くべき生命力を感じさせています。

そして競い合うように、またハーモニーをかもしだすようにして咲いているのが、鮮やかな黄色いミヤマキンポウゲ。　キンポウゲ科の植物は、タガラシ、キツネノボタンなど小さい川べりや田の畦道などにもよく見られるものから、オダマキ、シュウメイギク、テッセン、等々美しい花々や、有名なトリカブト、白い十字架の花センニンソウ等々、よく知られている花たちが含まれます。

このミヤマキンポウゲは、平地の野草より大型で見る人の心にまで届くような美しい色彩をもって、緑のひろがる急坂に群生していました。

まことに、高山に咲く植物たちは、美そのものであり、厳しい氷雪に耐える強靱さを繊細な美しさのなかに秘めて、しかも人知れず咲く姿は、神の国から澄みきったメッセージを語り続けているのを感じさせます。

（なお、この写真は今夏、北海道の瀬棚での聖書集会からの帰途、長野の集会での途中に登った山での撮影です。木曽駒ヶ岳は、標高2,956m中央アルプスの最高峰です。（写真、文ともにT.YOSHIMURA）